『地域つながる おとなりフェス』

フランス・パリの「隣人祭り（りんじんまつり）」からヒントを得て、２０１９年度にスタートし、今年度で３回目の開催となりました。

「隣人祭り」とは、パリのとあるアパートで起きた高齢者の孤独死がきっかけとなり、普段接点のない住民が、おとなり同士、顔の見える関係をつくろうと、アパートの中庭に食事を持ち寄ることから始めたといわれ、世界各国に広まった交流の場です。

日本には昔から、「隣人祭り」の様な、地域のつながり、集いの場が存在していましたが、それらが薄れつつある昨今、改めて**“富士見市における地域のつながり”**を皆さまと共に考え、広げるきっかけとなることを願い、**「地域つながる　おとなりフェス」**を、企画いたしました。

「地域つながるおとなりフェス」当日は・・・

暮らしの中で、ご近所やお仲間と積極的に交流し、地域で輝いているお二人から、地域で活動している様子・地域と関わることになったきっかけ・想いなど、心温まるエピソードとともにお話しいただきました。

講師の宇城様との対談中は、普段と違う雰囲気に、とても緊張されていた三浦さん、前山さん。
終了後は、いつもの笑顔のお二人でした。
ありがとうございました！

三浦綾音さん　前山美智子さん

ボランティアの始まりは、保育園の頃。子どものころから、お手伝いや、お琴の演奏等で施設を訪れていたことが、現在のボランティア活動や地域活動につながっています。

ご近所の方は、皆さんいい方で、声掛け合って、助けあって暮らしています。毎日が、とても楽しいです。とにかく皆さんとのおしゃべりは、大切な時間です。

お二人のお話しは、
『地域つながるおとなりフェス』
講演動画に、収録されています。

2022年度「地域つながる おとなりフェス」講演動画 期間限定でYouTube配信中！

２月２２日（水）に開催した「地域つながる　おとなりフェス」の講演動画を期間限定で公開しています。
ぜひ、団体の研修で、サロンで、個人で、様々な場でご活用ください。
収録映像（約100分）：基調講演と、ディスカッションを収録
公開期間は２０２３年９月３０日まで。
ご希望の方は申込フォーム、または生活支援コーディネーターまでお問い合わせください。

申込フォーム

編集後記

今号は、すりぃるレター特別編！
講師の宇城さまの講演（中面）では、withコロナで共存する日常を「コロナ下」と表しています。
現在は、もうコロナ禍（非日常）ではないと、改めて感じた言葉でした。

発行元

社会福祉法人 富士見市社会福祉協議会
（生活支援コーディネーター）
〒354-0021
富士見市大字鶴馬1932-7
市民福祉活動センター「ぱれっと」内
TEL：049-254-0747　FAX：049-255-4374

～生活支援体制整備事業は富士見市からの委託事業です～

スマホで読み取り！
富士見市社協HP

公式SNSも続々更新中です！

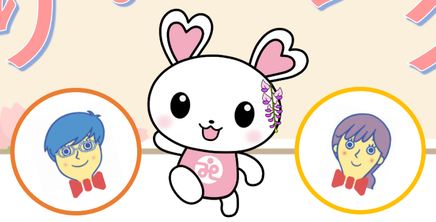
「富士見市社会福祉協議会」で検索
Twitter（ツイッター）　YouTube（ユーチューブ）

「富士見市ボランティアセンター」で検索
Facebook（フェイスブック）　LINE（ライン）　Instagram（インスタグラム）

Vol.4
2023. 3
FUJIMISHI SHAKYO

生活支援コーディネーターからの

すりぃるレター



こんにちは！富士見市社会福祉協議会の生活支援コーディネーターです。
すりぃるレターVOL.4は、特別編！
2月22日（水）に開催した『地域つながるおとなりフェス』をギュッと凝縮。
当日の基調講演（講師：宇城絵美様）を「すりぃるレター版」に再編成。
皆さんの地域が、もっと元気に、
「すりぃる」があふれる街になりますように～

特別編

今月のお写真　「地域つながる　おとなりフェス」開催の様子

『つながりが生み出す地域の力』

特定非営利活動法人 全国コミュニティライフサポートセンター（CLC） 宇城 絵美

人口減少とつながりの貧困

はじめに、日本の社会状況の変化を見てみましょう。日本の人口は2004年12月にピークを迎え、人口1億2,000万人、高齢化率は19.6%でした。その後、人口減少・高齢化が進み、2050年には人口が約9,500万人、高齢化率は40%近くになると推測されています。

振り返ると、介護保険前はわずかな介護サービスしかありませんでしたが、地域にはさまざまな人とのつながりがありました。それが、介護保険制度によってサービスが充実し、個別支援が強化されることで、地域の人とつながる機会が減りました。よくお茶飲みにきていた近所の人は、「いつ行ってもいないから」と足が遠のき、料理のおすそ分けをしながら見守ってくれていた隣の人も「プロの人が来てくれたなら安心ね」と疎遠になって、いつの間にか地域の人とのつながりが切れ、会うのは介護保険サービスの職員だけ。地域から孤立をさせている状況があるのではないでしょうか。

いま私たちは「つながりの貧困社会」にいます。単身世帯が増え、ひきこもりや８０５０問題などが話題になり、社会的孤立・無縁社会という言葉が生まれました。若い世代は、スマホの先にたくさんの友だちがいるけれど、困ったときに実際に助けてくれる友だちはどのくらいいるのだろうと考えたとき、現在の人口問題は、高齢者だけでなく、若い世代、子どもたちの問題でもあるとわかります。

介護が必要になっても、それまでの近所づきあいや趣味仲間との活動、地域での居場所や役割を保ちながら、必要な介護サービスを適切に利用して、地域で暮らし続けることができる「地域共生社会」の実現が求められています。

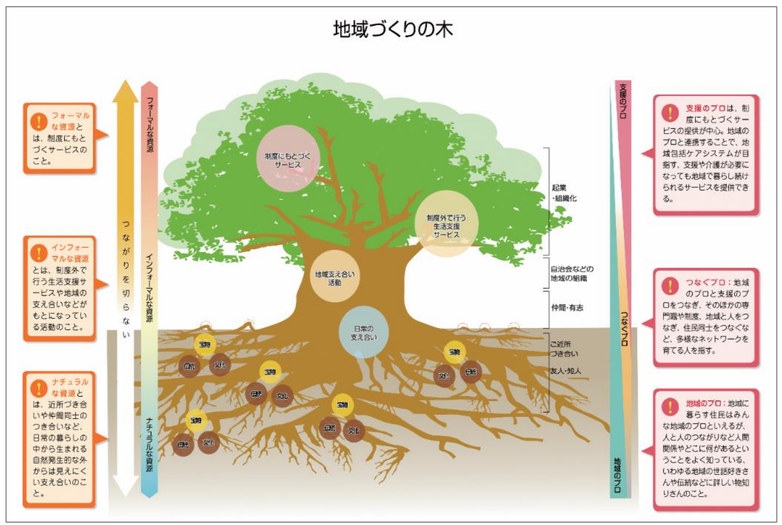


図１

“支え合い”には、「見える」ものと「見えにくい」ものがある

図１は、地域づくりを1本の木にたとえたものです。枝葉の部分は、介護保険サービスなどのフォーマルな資源を表しています。幹の部分は、自治会などの組織の活動、ボランティア活動、制度外の有償サービスなどの**インフォーマルな**資源です。根っこの部分は、近所づきあいや、そこから発展した日常の支え合いなどを意味し、「ナチュラルな資源」と呼んでいます。根っこは土のなかにあって、見えにくい支え合いです。根っこの近所づきあい・友だちづきあいを広げ耕すことで、そのつながりが幹の住民活動を支え、枝葉の制度・サービスを適切に伸ばすことができます。

普段意識をしていない根っこの部分について考えてみましょう。たとえば、お茶飲みや立ち話、おすそ分け、犬の散歩などは日常でありふれた光景ですが、それらには「居場所」「集いの場」「健康づくり」「交流」「情報交換」「見守り・見守られ」「安否確認」などの支え合いの要素が含まれています。一人ひとりがもつ多様な“つながり”が、お互いを気にかけ合い、ちょっと困ったことがあると支えたり支えられたりする「支え合い」の源になっています。すでにある個々のつながりを“発見”し、そのなかで行われている気にかけ合いや支え合いの“意味”や“価値”を地域みんなで共有することが大切です。

楽しみながら、つながりのある豊かな暮らしを

コロナ下でわかったことは、「〇〇が中止」になっても、地域では気にかけ合い、つながり合う関係が切れていなかったこと、そしてこの関係が人の元気を担保していたことです（図２）。自治会長や民生委員などは、地域の気になる人を、今まで以上に気にかけていました。これが日常的にできているのであれば、わざわざ通いの場を開いて集めなくてもよかったのではないか、「集める」ことばかりに目を向けるのではなく、自発的に「集まる」場にも目を向ける必要があった、とある市町村社協の会長が話されていました。

通いの場は、サロンや介護予防教室だけでなく、自宅でのお茶飲みや散歩仲間、スーパーでの立ち話など、無数に存在しています。地域デビューを考えるときには、自治会やボランティアグループなど組織的な活動などをイメージしがちですが、ぜひ近所づきあいや地元のつながりづくりも意識してください。人と人がつながることから、「気になる存在」が生まれ、それが「気にかけ合う仲」となって、ちょっと困ったことがあると支えたり支えられたりする関係へと発展していきます。

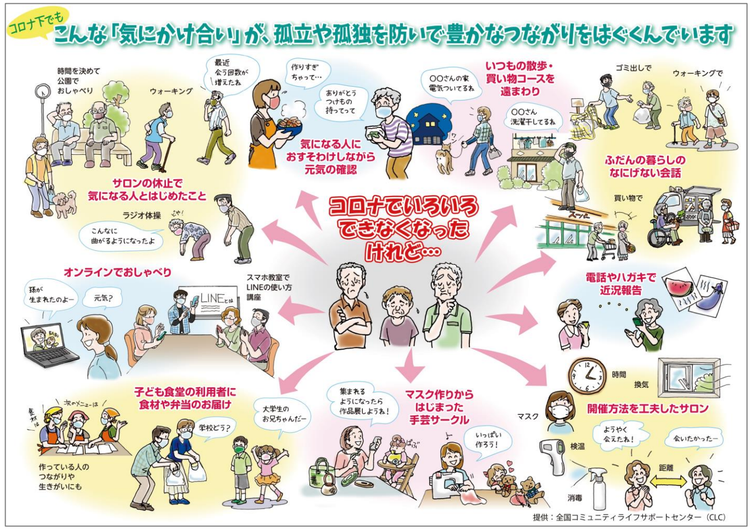


図２

東京大学高齢社会総合研究機構は、健康長寿のポイントを、①社会性があって、②毎日よく動き、③よく肉料理（タンパク質）を食べることだとまとめています。家の外に出て、人と交わることが、結果的に体力や筋力の維持につながり、自分の健康寿命はもちろんのこと、仲間の健康寿命を高め、元気な地域を育みます。ぜひ自身が楽しみながら、つながりのある豊かな暮らし方を次の世代に伝えていただければと思います。

宇城 絵美（うじょう・えみ）氏
特定非営利活動法人 全国コミュニティライフサポートセンター（CLC）
出版・販売グループ長

学生時代に、阪神淡路大震災の被災地に向けて、地元・栃木県から、ボランティアコーディネートを含めた後方支援を経験。CLC入職以降は、主に広報・出版を担当するほか、生活支援体制整備事業のアドバイザーとして自治体に赴き、生活 支援コーディネーターとともに地域のつながりを見つけ、地域づくりにつなげている。コロナ下においては、全国各地の住民の工夫したつながりや気にかけ合いを取材。